

# 山村農家の生業の変遷

高度経済成長前後

The Change of the Livelihood of Farmers in the Mountain Village: 1950-1970

倉重 加代

Kayo Kurashige

鹿児島女子短期大学

本稿は、高度成長期前後における山村住民の生業の変化を、山口県宇部市万倉地区のある集落を事例をもとに分析したものである。多様な生業が営まれていた昭和20年代に比べ、高度成長期以降は収入源の種類が減少するとともに、当該地区の多くの人が離農、離村した。一方、高度成長期は全国的には造林が盛んであったが、当該地域が産炭地が近く天然林の需要が比較的遅くまでであったこともあり、人工林への転換が進まなかった。そのような状況のもとでも、農業を営みつつ人工林の育成を始めた農家がある。今後は、当該農家の造林後の追跡と、生業そのものだけでなく生業を通じた社会関係の解明が必要である。

**Keywords** : mountain village, high economic growth period, livelihood, farm-forest household, natural forest

**キーワード** : 山村, 高度成長期, 生業, 農家林家, 天然林

## 1. はじめに

高度経済成長期、わが国の村落（農村）研究はたいへん盛んだったが、村落のひとつである山村研究は少ない。1930年代から40年代には、家、同族などの家連合、村落などが主要な研究対象とされ、それらの結合の特質に関心が寄せられた。その後、戦後改革の過程において、家族制度や村落の共同体的な特質、寄生地主制など一連の農村社会の構造が近代日本社会の問題である「封建遺制」として取りあげられる。そして、農村社会の構造の解明と、その戦後改革における変化および「封建遺制」の残存状況の解明が、新しい日本社会の建設にとって重要な課題とされ、こうした課題設定がその後の社会学における村落研究の方向を規定する結果となった（蓮見音彦 2007:11-2）。村落研究のこの方向性は調査対象の偏りにもあらわれ、わが国の村落研究をリードしてきた日本村落研究学会の年報に掲載されている山村研究を振り返ってみても、全体の掲載論文数からすると山村研究は少ない。また、研究内容も高度成長期を扱ったものについては、第二次大戦後の産業化、都市化の進展に伴う山村経済の衰退と、それに伴う山村の解体（とその後の再編成）を扱ったものに偏っている（倉重 2012）。

また、社会学においても、あくまで都市との対比で特徴づけられる村落（農村）への関心が強く、それがやはり調査対象の偏りに現われた。農村社会学研究は主として平地農村に向けられているという指摘や、典型的村落を調査研究してきたのではないかと問題提起が1960年代から70年代になされている（倉重 2014）。当時、村落の一つと見なされている山村固有の性質を見いだそうとする研究はほとんど見られない。

しかし、実際に、山村を研究しようとするとは既存の研究枠組みでは困難が伴う。第1に、全体社会（ムラの枠）が不明瞭だという点である。山村は外部との交流がないと生活が成立しないため、その外部との交流の不明瞭さにより、ムラの枠がつかみにくい。第2に、山村内部があまりに多様で多層的なため、議論の普遍化が困難な点である。山村の主要生業として養蚕や製炭、用材生産などがあるが、1924（大正13）年『地方山村林業経済調査書』（農商務省山林局）の産業産品別収入比率をみると、個別の村単位で見れば必ずしもその依存度は均一ではなく、一方で用材生産を含む林産収入比率も村によって差が大きい。第3に、社会学固有の研究視点として、生業に左右されず人として取り結ばれる社会関係への関心が強い点である。鈴木栄太郎は農村社会で生きる人々の社会関係を分析する際に、生業の区別が必要になるのは経済的見地からであり、農村社会学としては生業の種類を区別する意義はないとした。彼の認識は後の社会学の農村研究に大きな影響を与えたと思われる（倉重 2014, 2015）。

第1、第2の点を研究しようとするとは生業の分析が不可欠となる。ところが山村経済を支える産業（稲作、製炭、養蚕、用材生産、畑作等）やその他の営み（焼畑、狩猟、採取等）、土地や資源の所有・管理等それぞれに研究分野があり、そ

それぞれの研究分野を深めつつ山村全体を包括的に把握するのは困難である。社会学の固有の研究対象を明確にするという観点からみると、生業に左右されない事象を分析対象にするというのは、研究のあり方としてやむを得なかったかもしれない。

このような中で、筆者は社会学では研究が乏しかった山村について、一つの集落の事例を通して山村分析をすすめている。これまでに統計資料を用いて山村の生業を分析し(倉重 2015)、住民宅に保管されている金品授受記録から、集落内住民の社会関係について分析してきた(倉重 2017, 2018)。本研究では引き続き、山村集落住民の生業の事例分析を通して、山村住民の生活の多様性と多層性を明らかにすることを目指す。そこで本稿では高度成長前の山村住民の生業と、高度成長期の生業の変遷について実態を明らかにする。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査対象者

調査対象は引き続き、山口県宇部市万倉地区 Q 集落の農家である。

本研究での分析対象は以下の2つである。

①聞き取り調査：2012年9月～2019年10月に断続的に聞き取り調査をおこなった。対象者は以下の方々である(敬称略)。

- ・ N 家関係者：(NA 現世帯主、昭和13年生、万倉地区在住)、NA の妻(昭和16年生)  
NA の妹(昭和17年生、宇部市内在住)
- ・ M 家関係者：M 家出自女性4人(昭和5年生、9年生、14年生、21年生、いずれも宇部市内在住)、MS(14年生、36年婚入、万倉地区在住)、MR(37年生、MSの長男)

②N 家所蔵の記録物

- ・ NA の父親の日記(昭和45年4月～6月、同年9月～46年4月)
- ・ 藁工品組合記録(昭和28年3月～33年2月)

断片的な記録だが、当時の事情を知る上で重要な情報である。

これらの調査のうち、主にN家の生業を中心に、M家関係者への聞き取り調査内容や当時のことが記されている印刷物(統計資料、広報、書籍等)と照合しつつ、高度成長期前後の山村農家の生活の多様性と多層性について考察していくことにする。

分析の中心となるN家はQ集落に江戸時代より続く農家で、現世帯主NAが7代目と伝えられている。NAらが子どもの頃はNAの親夫婦(6代目)が主な農作業の担い手で、祖父母(5代目夫婦)は病を患いすでに生産的な活動はほとんどできていなかった(祖父は昭和22年、祖母は25年に逝去)。後にNAはサラリーマンとなり、昭和34年から46年7月まで山口県外に居住していた。NAには成人した弟妹が3人おり、弟(22年生)は36年、高校進学時に親元を離れ宇部市内企業に就職後、県外に転勤、その後も県外に居住している。2人の妹は結婚前まではQ集落に住んでいたが、一人(15年生)は結婚して旧山陽町(現山陽小野田市)に、もう一人NIは結婚して旧楠町(現宇部市)に居住した。N家は農家であるが、山林を保有し林業もおこなっている。ただし、当初は天然林生産のみで、昭和30年代に意識して造林を始めた家である。

### 2.2 調査地の概要

Q集落は山口県中西部、宇部市万倉地区の中心部からは約6kmのところ position する。中心部には万倉村時代は村役場、楠町時代(昭和30～平成16年)には町役場万倉支所、宇部市と合併後は出張所が置かれている。図1に集落の位置関係を示した。その中心地から県道を美祢市中心部方面に向かって約3km、K集落まではバスで行くことができるが(昭和27年に路線開設)、そこから先は公共交通機関はない。宇部方面から船木鉄道が、大正12(1923)年に万倉中心部まで敷設されたが、昭和36年10月に廃止、その後はバスが運行されている。

地形的には中心部から南方面は平場が多く田畑が広がるが、北部や西部は山がちになる。K集落からQ集落方面は川沿いで起伏がなく古くから馬車通行が可能な道路があり、後に車通行ができるよう道路が整備され、人の往来、物流とも主にK集落経由でなされてきた。K集落以外からも、隣接するG、J、S、Fの各集落へ峠を越えて徒歩での往来がかつては可能であった。G集落には万倉小学校の分校が昭和55年まであったこと、吉部地区および萩方面への近道であったことから一定の往来があったが、自家用車が普及してからはほとんどK集落経由で人が行き来するようになっている。た

だし K 集落と Q 集落の間は途中 2km 程度民家がなく、他の集落とも峠越えになるため、自立性の高い集落であった。Q 集落は昭和20年代半ばには15戸あったが、40年代後半には6戸程度に減少している。N 家は離村せずとどまった家の一つである<sup>1)</sup>。

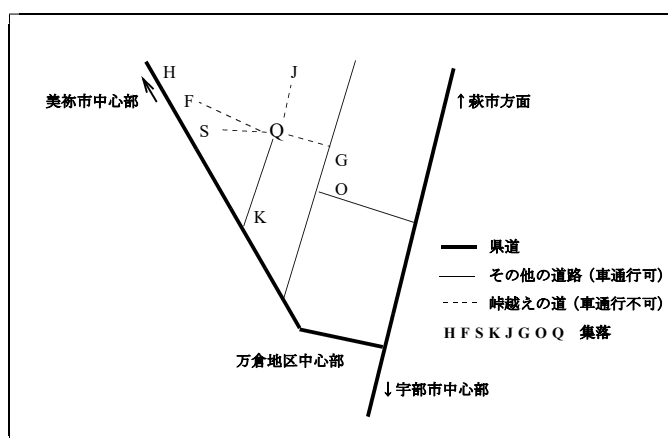


図1 集落位置関係図

### 3. N家の生業

#### 3.1 昭和20年代の生業

N 家の主要収入源は米である。

4月になると、牛に犁を引かせて田起しをする。1箇所を2回鋤いていた。ただし、麦と菜種を植えていたところは1回鋤いたら良しとした。麦と菜種の収穫後に田起しをするため、その時期が遅れることと、もともと畝にしているため、冬中レンゲソウしか植えていない場所に比べると起こしやすかったからである。菜種と麦を刈る順序はあまり気にしていなかったようである。

4月中旬には苗代田に種籾を撒いた。

5月になると畦刈り（草刈り）をおこなった。水を当て（張って）、牛に馬鋤（牛や馬に引かせて水田の土をかきならす農具）を引っ張らせて土を平らにし軟らかくした。その後、牛に犁を引かせてしろすきをおこなった。田植え前日には苗代田から苗取りをした。適量を藁で束ねる作業だが、2反（1反は約990㎡）分の苗を取ったら翌日は肩がはしる（激しく疼く）とNAの母は話していた。そうして田植えの日、苗を植える直前に牛に馬鋤を引かせて代掻きをおこなった。手で植えていたため土をほぐしておく必要があり、田を鋤く作業を繰り返す必要があった。家畜の糞や藁、レンゲソウを混ぜて堆肥を作っていた頃は堆肥が熟さなければ田に入れられなかったため、その発酵の遅速により、元肥を施すタイミングは水を張る前だったり後だったりしていたという<sup>2)</sup>。

昭和20年代、NAやNIが子どもの頃には田植えは日曜日に行われていた。学校に通う子どもを労力としてあてにしていたのもあるが、上述したように田ごしらえに時間がかかるため毎日連続して田植えをするのは困難であった。また、「ひとホノギ」の田植えは一日で行う習わしがあった。ひとホノギとは、一つのエキアイ（谷間）、同じ水源から水を張るひとかたまりの水田を指し、小字と呼ばれる範囲である<sup>3)</sup>。エキアイからの水は水量が多くなかったため、ひとホノギの水を張るのに数日かかっていた。そのため結果的に田植えが1週間ごとぐらいの作業となった<sup>4)</sup>。

田植えは女の役割であった。1反5畝（1畝は約99㎡）程度の面積であれば、小学生のNIら姉妹と母親で一度に田植えをすることが可能だったが、2反の広さになると労力が不足したため、集落内の他家から応援を得た。一つは「テマガエ（手間替え）」で、2戸間で労力の交換をしていた。N家とテマガエする家は決まった2戸だった。もう一つ、N家から労力を交換する広さの田が相手方ない場合は集落内の1戸から人を雇っていた。田植えは6月いっぱい1ヶ月程度かかった<sup>5)</sup>。

Q集落では田起し、しろすき、代掻きなど牛を使う作業と苗サンバ（苗を適当な間隔で田に配る作業）までが男の役割で、田植えは女の役割だった。万倉村内の他の集落では男が田植えをするところもあった。また、NAの父には5人の弟妹がいたが、婚家が農家だったため農繁期の手伝いに行き来することはなかった。

夏場は除草や水の管理が主な仕事であった。Q集落は山の谷あいの川沿いに水田がある。田の水は、①先述した山のエキアイからの出水、②川から共同（2、3軒）で水路をつくって水をひく、の2種類があった<sup>5)</sup>。②の場合は共同で水路

の掃除をするなどはあったが、それぞれの家が異なる水源から山水をひいていたため、水利のルールが厳しかった印象はなく、水をめぐって集落内や近隣の集落とでもめ事になったという記憶や言い伝えはない。また、田植えをして1ヶ月後頃に追肥をおこなった。NAが子どもの頃にはすでに化学肥料が入ってきており、当時は肥料の3要素——チッソ・カリ・リン酸——を自分で配合して撒いていた。

稲刈りは10月10日頃からおこなった。稲刈り時は田植え時ほど男女の役割は明確ではなかった。その後、稲刈りを終えた田から順に耕し始め、11月になったら乾燥した場所にははだか麦・小麦を、湿気の多い場所には菜種を植えた。小麦・はだか麦は収入源となり菜種は自家用だった。麦植えと平行して米の脱穀も行ってた。万倉天神祭がおこなわれる11月23日までに植えることを目標にしていたが、天候に左右されるため年によって多少前後し、11月末頃までかかることも多かった。秋に植えた麦と菜種は、5月、田植えの準備と並行して収穫した。

椎茸も栽培、出荷した。NIらが子どもの頃は、杉林の中の日陰にホダ木を立てかけていた。秋に収穫し、寒くなると椎茸が出なくなるので、冬になるとホダ木を古い炭窯に移していた。古い炭窯を利用してホダ木を立て、天井と入り口をビニールで覆うと冬でも椎茸が出ていた。昭和30年頃は朝5時30分万倉駅発の汽車に乗って宇部市中心部の琴芝駅近くの市場に出荷していたという。出荷するときはNAらの母親が行くことが多かったが、冬休みになるとNAの弟がついて行っていた。生椎茸を手元にある空段ボール箱にバラの状態に詰め、背負って市場に持っていき、市場で新聞紙を広げ、その上に椎茸を並べて置いていた。競りは市場に任せたが、当時、背負って持っていった程度の量の椎茸が、軽トラック一台の荷台いっぱい白菜と同じくらいの売値がついたとNAの母親が話していたという。

鶏卵も換金した。昭和32年頃まで、NIが中学校登校時、学校近くの商店に買い取ってもらっていた。買い取ってもらっていたのはいつも同じ店だった。飼っていた鶏は8羽程度、10羽はいなかった。地下足袋が入っていた箱に新聞紙に包んだ卵がちょうど20個詰められたので、20個が持参する目安となった。病弱な子は毎日食べていたが、他の家族員は毎日食べることはなく、自家消費分を後回しにして換金していた。昭和30年代前半頃、小さなあんパン1個の値段が5円だった頃に、卵1個を10円程度で買い取ってもらっており、9円50銭より安い金額だったことはなかった。

藁は家畜の飼料や家畜用の敷物、水田の肥料に使用するとともに、草履や正月の飾り物を作ったり、縄を編んだりしていた。用途が多岐に渡ることから藁自体が換金できていた上に、加工して生計の足しにした。縄を編み、その縄は自家用にも使用していたが、木材を扱う仲買業者が一玉いくらと買ってくれていた<sup>6)</sup>。ふごは自家用に作っていたが、笠や蓑は自作せずを買っていた<sup>7)</sup>。昭和28年3月、山口県新生運動の一環としてQ集落内4世帯10人で藁工品組合を結成し、筵編み機を購入してからは筵を編み始めた。筵を編んでいたのは主に冬と雨天時であった。

木炭も量は多くないが作って出荷もしていた。炭俵は萱で作っていた。炭焼小屋は共同で使用することはなく各戸で自分の山に持っていた。

そして何より、山の木が重要な収入源であった。建築用材や薪炭材のみならず、調査対象地は産炭地の近くであったことから、木は坑木としても莫大な需要があった。NA氏の記憶では、坑木用は相対的に高値がつき、直径5cmくらい、長さ1mくらいからの直材であれば、「皆持って行った」という印象がある。木を売るときは、仲買業者に「ひと山いくら」という形で立木を売ることが多く、ひと山まるごと立木を買った仲買業者は、その立木を建築材、薪、坑木など仕分けして出していた。また、薪が欲しいと、薪用の木を専ら持っていく者もいた。業者は細い木までも切って持って行くこともあったが、この木は切らずに残してほしいと言えたいいは残してくれた。薪は業者ばかりでなく、個人で買いに来る者もいた。薪は割木とよんでいた。

ひと山まるごと立木を売る方法は、売る側（山の所有者）から見てもメリットがあった。この頃はスギやヒノキもあったが、樹種別では松が主で、手入れをせずともある程度まっすぐに伸び、成長も早く強度もあったため重宝されていた。杉やヒノキもそれほど意図して植林をすることもなく天然木であり、また、今日ほど材質を問われなかった当時は、下刈りや枝打ちなどの手入れをほとんどしていない。それでも木が育ってくればまとまったお金がもらえる。今日ほど手入れが必要でなかった当時は、木を売るにしても他に比べて労務費の割が相対的によく、現金の蓄えはなくても山の木を売ればまとまったお金が入っていた。仲買業者に売った木を自分たちで切って出すときもあり、そのときは業者から労務費を受け取っていた。

椿は子供の頃にはよく採っていた。田の畦に先代が植えていたもので、冬の間、秋が終わって葉っぱが落ちた後、春の芽が吹くと採れないのでそれまでに採っていた。三桎はN家にはなかった。椿や三桎の皮を剥く業者がO集落（図1）にあったので、採った椿を決められた長さで重さに束ねておくと、業者が買いに来ていた。

### 3.2 N家のその他の作業

N家では現金収入があった生産・採取以外にも、多くの営みがあった。

まず、野菜はほとんど自家用で栽培した。畑仕事は主に女の役割であった。2月になるとじゃがいもの種芋を植え、3月には温床を作りさつまいもの苗作りを始めた。4月になると、かぼちゃ、きゅうり、トマト、なす、すいか、漬物うり、とうもろこし、唐辛子の種を蒔き、里芋やれんこん、こんにゃく芋の植えつけをした。唐辛子は漬け物用にわずかに植えた。5月になると小豆、しょうがを植えつけた。梅雨に入り田植えの時期になると、その合間にサツマイモのつるを植え、葱の種蒔きをおこなった。田植えが終わると畔に大豆と黒豆を植えた。

7月下旬になると蕎麦を植え、8月には葱を定植し、キャベツや白菜、にんじんの種を蒔いた。9月にはごぼうや大根、蕪、ほうれん草の種を、11月にはエンドウ豆やそら豆の種を蒔いた。

多種類の野菜を栽培していたため植付け時期は多忙であったが、すべて自家用だったこともあり収穫時期は多忙ではなかった。また、一度に収穫時期を迎えないよう、植え付けの時期をずらしていた。

N家ではみょうがや苺は植えっぱなしで時期になると収穫した。ふきや筍、わらびは春に、秋に松茸を採取した。かつては松茸を多く採取することができた。山芋は秋、つるが枯れないうちに芋のある場所に印をつけ、冬に掘りに行っていた。秋は多忙のため芋を掘る暇がなかった。

牛の世話も大事な営みであった。牛は農耕や運搬に用い、糞尿は堆肥として利用、使役の後は貴重な現金収入になるなど、この時代の自給的な農業・林業経営にはなくてはならない重要なものであった。N家では昭和20年代までは牛1頭だったが、20年代終わり頃にもう1頭増やして2頭にした。2頭と1頭とでは作業効率がとても違い作業は捗るが、餌が2倍必要になるなど、管理するのはたいへんになった。若い牛を業者から購入し3～4年程度経ったら若い牛と交換していた。牛を交換するタイミングは、業者が促してくる場合もあれば、自分から交換したいと要望する場合もあった。

Q集落では黒和牛が多かったようだが、昭和13年生れのNAが物心ついてからはずっと肥後牛だった。また、当時、家畜も家族の一員のように大事に扱っており、便利性もあるだろうが、必ずと言ってよいほど台所の勝手口の近くに納屋があった。Q集落では、多くの家が南向きで、家の東側に納屋がある<sup>8)</sup>。他家と牛の貸し借りはしていなかった。

木を伐るのは男の仕事だったが、薪採りは男も女もやっていた。子どもも小学校に上がる頃、山を歩けるぐらいの年齢になれば、たきぎを拾う程度は誰もがやっていた。小学校5、6年頃になるとのこぎりを使って薪も切っていた。薪は日常生活の燃料もさることながら、葬儀の際に大量に必要だった。葬儀のときは葬儀を行う家の薪を使用した。キハンマイ(木飯米)といい、いつ何があってもいいように薪を準備しておくことが重要だった。飯米は家の外から見えないが、木(薪)は家の外から見え、どの程度蓄えてあるか、その家の暮らしぶりに余裕があるかが見えてしまう。そのためにも薪を整えておくことが求められた。これらは主に冬の作業だった。

冬になると狩猟もおこなった。主に猪で、キジや山鳥も撃って食用にしていた。狐や狸がいれば獲ったこともあるが、狙って狩っていたわけではない。Q集落周辺には散弾銃がある家が多かったようだが、狩猟を専門におこなっている人は昭和20年代頃にはいなかった。猪の皮をなめして農作業するときの敷物のようなものを作るというのは戦時中にはあったようで、皮を干しているのを見たことがあるが、実際に作っているところをNAらは見たことがない。狩猟は必ずしも生活のためではなく、狩猟時期に楽しみで行っていたようであるが、肉類をなかなか買うことができなかったのも、猪などは貴重なタンパク源だった。また、今日と比べると鳥獣駆除の依頼を受けるような問題はほとんどなかったという。

### 3.3 N家の生業——昭和30年代～40年代の変遷

N家の生業は、昭和30年代から40年代にかけて大きく変わっていく。

表1にN家の換金作物・採取物の変遷を示した。それをみると、まず気がつくのが、換金物の種類が減少していることである。周知のとおり燃料革命や流通革命や木炭や藁工品の生産を終え、原木では坑木利用がなくなり、竹や和紙原料の楮も経済的価値を失っていく。

毛利藩の三白政策から万倉地区においても和紙を作り楮生産が盛んで、Q集落に隣接するO、S(いずれも図1参照)では昭和25年頃まで紙すきをおこなう家があった。その後は万倉地区に隣接する吉部地区の紙すき場に楮が送られたという記録があるが(山口県宇部農業改良普及所1984:18)、N家で楮を採っていたのは20年代頃までだったと思われる。また、NAの表現を借りれば「ロットを求めるようになった」ため、同じ規格で一定数量生産できないものは換金対象から外れていく(N家では鶏卵)。

稲作は、昭和45年は85俵生産、供出68俵であった(日記より)。その後、減反が始まるため、45年頃が生産のピークで

はないかと思われる。大正8年に61俵生産し、44俵を供出した記録が残っており、品種改良などにより反収が上がったこともあるだろうが、少なくとも昭和20年代以降40年代半ばまで、林地を切り開いて田にしたり、Q集落を離れた者から田を購入したりして田の面積が拡大したことはない。

表1 N家の換金作物・採取物の変遷

	生産品	採取
昭和20年代半ば	米, 麦, 鶏卵, 木炭, 藁工品 (縄)	原木 (建築, 坑木, パルプ, 薪等) 楮, 藁, 竹
昭和20年代後半	米, 麦, 鶏卵, 椎茸, 木炭, 藁工品 (縄・藪)	原木 (建築, 坑木, パルプ, 薪等) 楮, 藁, 竹
昭和30年代前半	米, 麦, 鶏卵, 椎茸, なす 木炭, 藁工品 (縄・藪)	原木 (建築, 坑木, パルプ, 薪等)
昭和30年代後半	米, 椎茸, なす, 藁工品 (縄・藪)	原木 (建築, 坑木, パルプ, 薪等)
昭和40年代半ば	米, 椎茸, 栗	原木 (建築, パルプ, 薪等), 庭木

\*昭和30年代までは聞き取りによる。昭和40年代半ばについては当時の世帯主の日記より。

昭和30年頃になると、万倉地区でなすの共同出荷を目標として組合が結成されるが、その頃に、N家でもなすを作り始め、10年くらい出荷していた。

椎茸の栽培は継続的に行われてきたが、昭和32年頃、町の補助金を得てM家と共同で椎茸不時栽培施設を造っている。10～12月頃に木を切り、適度に乾燥させて春先に菌を打った。梅雨を二度越した後、露地栽培にするものと不時栽培するものに分けた。不時栽培の場合、水槽にホダ木を一晚漬けて水を含ませ、水槽から上げて水槽横に横積みし、藪で覆って2～3日程度蒸らした。芽が出たらハウスの中に入れ、ハウス内の湿度を保っていた。この方法で一度に揃って椎茸が出ていた。出荷時はA4用紙程度の底面積で高さが4～5cmくらいの箱を木で作っていたが、後に段ボールになると、それを買わなければならないようになり経費がかかるようになった。昭和45年秋から冬にかけては1袋100gで計253袋を出荷したことが日記に記されている。

栗は昭和36年頃植樹している。同時期、楠町で栗栽培を奨励しており、町より補助金を受けて栽培を始めたと思われる。45年の日記には、数量は不明だが出荷していることが記されている。

牛については、日記に「昭和45年6月5日、牛を交換、差金10万円を受け取った」とあることから、飼育した牛を売渡しただけでなく、若い牛を買ったことがわかる。この頃には機械化が進んだため農作業では牛をほとんど用いなくなったが、牛自体は50年代前半頃まで飼育しており、伐採した木を車道まで運搬するのに牛を用いていた。

また、NAらの従姉妹の嫁ぎ先で木を扱うことを生業としている家があり、その家に割木を売り渡した記録が日記にある。また、40年代半ばに庭造りが流行っていた。N家で造った庭が評判となり、N家への庭の見学があるのみでなく庭木の注文もあった。N家では山中の木を持ち帰り自宅近くに植え、庭師に販売していたという。1本数万円の値がつくこともあったとのことである。

#### 4. 考察——山村の多様性

高度成長期前のQ集落内の状況を聞き取るのに限界があり、断片的な情報からの考察となるが、旧万倉村および集落における生業の多様性について考察する。

まず、Q集落内部の状況をみよう。

Q集落は山間部にあるが、N家のように多くの家が稲作を主とした生活を営んでいた。山間部なので平地はなく斜面を水田にしているのであるが、先述したように、エキアイからの山水に恵まれていたことが稲作中心の生活を営む上で重要だったであろう。ただし、所有する水田面積の大小はあり、ほとんど耕地を所有しない家もあった。N家は、農繁期にテマガエと集落内の人を雇う形で人手を確保したが、Q集落内には農繁期に一定期間、集落外から住み込みで働く人を雇っていた家もあった。M家では、女性が住み込みで働いていた（女性の居住地は不明）。他にも遠くからは角島（現下関市）からQ集落内某家に作業をしに来る者がいた<sup>9)</sup>。

所有する耕地がない者や耕地面積が少ない者は、集落内の他の家の稲作を作りに行ったり、集落外に勤めに出たりして

いた。稲作が主でなかった者としては、パンや菓子を作る職人や教員、坑夫ではないが炭鉱に勤めた者の他、企業に勤める会社員もいた。職人は戦時中に疎開してきた者である。

稲作以外の換金生産品として、N家が営んでいたものとしては、上述した薬工品の組合員は4戸で、椎茸不時栽培にかかわったのは6戸と伝わっている。他に、タバコを栽培していた家が2戸あった。また、M家ではかつて養蚕をしていたと伝えられている。家の造りやM家所有地に桑畑があったことなどがその言い伝えに信憑性を与える。聞き取りした者たちにはM家での養蚕の記憶はないが、隣接するG集落に居を構えるM家の分家が養蚕をしており、M家の畑に桑の葉を採りに来ていた。味噌はたいてい各家で作られていたが、醤油を醸造する家が1軒あった。母屋と別棟で醤油を醸造・保管する場所をシオケバ（塩気場）と呼んでいた。

山間部の、地形的には自立した印象を受ける集落内部の生業は多様であった。

次に、万倉地区における地域や集落の多様性を見ていこう。

『山口県厚狭郡誌』（1951、以下、『厚狭郡誌』）によると、当時の万倉村のうち、東万倉一帯で土壌と気候が栽培に適し、船木・小野田の消費地を控えている関係から、古くから野菜の栽培が盛んであったと述べられている。昭和24年度に主なものとして生産高が記載されているものは、タマネギ、キャベツ、きゅうり、トマト、なす、大根、かぶ、白菜である。大正10年頃に同地域で栽培育成の技術指導を受けた者が、温床育苗によるなす、きゅうり、トマト等の苗の栽培を試み、商品化することに成功し、それと同時に野菜の作付販売が急速に進展し、次第に栽培は万倉全地区に及び生産も着実に伸びていったという（宇部農業改良普及所編集部 1984）。また、『厚狭郡誌』によると、農協では搾油が盛んで、搾油機2台を備え付けて大々的にやっているのは、山口県内で営業者を除き同組合くらいと記されており、菜種油と油粕生産が盛んな様子がかがえる。そのほか、しいたけの増産を図ったり、油桐、茶の栽培を農家の副業として計画したりしているが（藤川辰雄編 1951）、これらのうち、椎茸と茶については楠町発足後も継続して農家に生産を奨励している。ただ、Q集落では誰も茶を栽培しなかった。

これらを同時期に調査された『1950年世界農業センサス』と照らしてみよう。まず、市町村別統計では、作物ごとにその町村の栽培農家数で収穫面積を除し、1栽培農家平均1畝の収穫面積以上のもののみ、生産農家数が掲載されている（調査は昭和25年2月1日現在で実施）。そこで、掲載されている品目のみになるが、農家総数に対する栽培戸数割合を算出した<sup>10)</sup>。『厚狭郡誌』に記載されている主な生産品のうち、上記条件を満たし統計に記載されているものは大根（栽培農家戸数割合98.0%）と菜種（同64.5%）のみである。主な産品だと村が認識している作物の1栽培農家当たりの平均収穫面積が1畝を超えないのは、野菜に関しては栽培が小規模を物語っているといえる。また、先述したN家での栽培品目のうち上記統計に掲載されているのは、大根、菜種の他は水稻（同97.6%）、はだか麦（同93.3%）、小麦（同63.1%）、大豆（同54.2%）、じゃがいも（同96.2%）、さつまいも（同95.3%）、そば（同17.6%）のみで、野菜は統計に記載されていないものが多い。山村住民の実態が統計データから見えにくい点については、林家のデータを用いてすでに拙稿で論じているが（倉重 2012）、農家の実態と、発表されている統計資料から把握される農家の姿が必ずしも一致しないことがこの点からもいえる。

さて、本統計で栽培戸数割合が90%を超えるような作物は、ほぼ村全域で一定量の栽培・収穫がなされていたといえるが、その割合が低下するにしたがい、村内でも栽培・収穫のばらつきがあることになる。上述したように、野菜の栽培が盛んな東万倉は、地形的にも平坦で人口が集中した消費地に近い地域である。一方でQ集落がある地域は山間地で大きな消費地に遠いため、特に自家用車が普及していない頃は鮮度が問われる野菜の生産には不利であり、他の生産品の選択へと向く。NIの父親がQ集落から自転車ですすを出荷していた頃に、そんな奥から持ってくるかと市場で冷やかされていたという。

次に、家畜についてみよう。1950年、万倉村の農家総数550戸のうち、役肉用牛飼育農家は402戸（73.1%）、鶏飼育農家は322戸（58.5%）である。以下、飼育農家数は乳牛2戸、馬28戸、山羊7戸、綿羊1戸、豚33戸である。同時期、Q集落ではこれらを飼育している家はなかった。隣のO集落には乳牛を飼育していた農家があり、N家ではその家から牛乳を分けてもらっていたという<sup>11)</sup>。

## 5. 高度成長期の変遷

次に、N家の生業の変遷を、燃料革命や流通革命で山村の資源の経済的価値が低下していく状況や当時の楠町の動きと関連させて見ていこう。

まず、薬工品であるが、先述したように、昭和28年、山口県新生運動の一環としてQ集落内の4戸で組合を結成し、

筵生産を始めた。組合結成の目的は、Q集落薬工品組合記録に「戦後農村内部基盤をつくる／民間推進団体たる基盤をつくる／同志の団結／所得向上及び生活水準の向上／自主的計画を実行／計画的計画を実行／計画的に近代化す／生産増強すると共に経済的地位向上／民主化徹底を図る／愛国心愛郷心を背景に協同態勢を取る」とある。荒廃した農山漁村の振興と民主化を図るため、山口県が昭和25年からスタートさせた「農村新生運動」（昭和27年より「農山漁村新生運動」に改称）を視野に入れていることがわかる。収益金による農機具の共同購入や慰安旅行を計画したり、組合員が病気になった際の見舞金を出したりしており、生活向上や相互扶助を目指していたことがうかがえる。

昭和30年に吉部村、万倉村、船木町が合併して楠町が誕生した後、「広報くすのき」によると、実施されてきた農業祭では、農林産物品評会で薬工品が少なくとも34年までは出品対象となっている。また、33年に楠町薬工品協同組合が活動を開始しているが、町の組合のその後の動きは不明である。Q集落薬工品組合記録には、33年の計画として「楠町薬加工組合加入の事」と書かれているが、その後記録が途絶えており、正確なことはわからない。Q集落の薬工品組合の活動でわかることは、32年の時点で美祢市方面から注文があったことが組合記録に残されており、36年にM家に婚入したMSの話によると、実際に製品を美祢市内の農協に卸していたという。そして40年代初め頃までには製品としての筵製作は終わり、その後は自家用にしばらく編んでいた。米乾燥機を購入するまでは米の乾燥に筵が必要だったからである。

ところで、薬工品の全国的な生産はどうだったのか。稲作が盛んな地域の農家の副業として薬工品の生産が全国的に盛んになるのは大正～昭和初期にかけてである（宮崎清 1985, 寺本 1998）。薬工品生産量の変化を見ると、1910年に約1億貫（1貫は3.75kg）だった生産量が、1920年代末には約3倍になる。世界大恐慌で一度2億貫を割ったが、その後は軍需生産が急増し、1940年前後は3億貫を超える。その後急速に生産量が減少するが、1950年前後には2億貫前後まで回復する（宮崎 1985:188-205）。宮崎清によると、昭和26年の収生産量が多いのは、兵庫、香川（1,000万枚以上）、茨城、千葉、富山、徳島（500万枚以上）、青森（300万枚以上）、秋田、新潟、静岡、山口、鹿児島（100万枚以上）であり、山口県は少なくともこの時点では収生産量が多い地域であったといえる（宮崎 1985:199）。しかし、高度経済成長期に、薬工品は次第に代替品に取って代われ、その姿を消し去っていく。流通革命により俵や吹が紙やポリ袋になった（林信彰 1974:14）。経済性、合理性、効率性が最優先される経済成長期にあつての薬工品衰退の様相は極めてすさまじいものであった（宮崎 1985:205）。

一方、N家における大きな収入源であった山の木はどうだったか。

昭和24年度の用途別素材生産割合をみると、坑木用の割合が、全国8.8%に対し、山口県は43.8%、万倉村では80%を占めた（倉重 2015）。当時の厚狭郡は宇部市、小野田市、船木町、埴生町、厚狭町という炭鉱地区に木林消費地を持っていたこともあり、木材の生産実績は山口県下で第1位を占めていた。と同時に木の伐りすぎが問題視され、治山、治水対策の必要性が言われていた（藤川 1951:68-9）。全国的にも戦中には軍需物資等に、戦後には復興のために大量の木材を必要としたことから、国内の森林が大量に伐採されていた結果、わが国の戦後の森林は大きく荒廃しており、国土の保全や水源涵養の面から、森林の造成の必要性が国民の間に強く認識されるようになっていた。そうした中で終戦の翌年には造林補助事業が治山事業や林道事業とともに公共事業に組み入れられる。ただし、終戦当時は深刻な食糧難のため、造林のための苗畑は農業生産に転用され苗木の生産は低調だったが、昭和25年頃に国有林が民苗養成事業を積極的に行つて以降、造林のための苗畑は急速に整備され、これに伴い苗木の生産は増加した。35年には民間等の苗畑面積、山行苗木の生産量および人工造林面積がピークになっている。30年代以降、燃料や肥料の変化により広葉樹等の里山林がそれまでのように利用されなくなり、建築用材や梱包資材、土木建設用材のための針葉樹の需要が大きかったため、広葉樹林の伐採とその跡地への針葉樹の植栽が進められた（林野庁 2014）。

全国的にはこのような状況の中で、旧楠町の広報誌「くすのき広報」第8号（昭和31年4月1日発行）に山の手入れに関する記事には（「しだ」のない緑の山に育てよう：造林と手入れ）、「林業を専業とするものの少ない私達の町では森林所有面積の少ないことや農業を専業としている関係から計画された間伐や枝打もズルズルのびてそのままになってしまいがち」で、「かつては『苗木は苗木まかせ、植れば自然まかせ、売るときは材木商まかせ』といった具合で大変なマイナスとなっていた」が、「皆さんの山を本当に価値あるものにするために、…（略）…お互いの山々を「しだ」のない立派な山に育て将来への資本の蓄積に努めましょう」とあり、その後も断続的に広報で山の手入れについて記事が掲載されている。



表2 人工林・天然林別面積（1960年）

	森林面積（単位：町）				割合（%）		
	総数	樹林地		その他	人工林	天然林	その他
		人工林	天然林				
楠 町	5,190	491	4,413	286	9.5	85.0	5.5
吉部村	2,155	257	1,739	159	11.9	80.7	7.4
万倉村	2,078	131	1,865	82	6.3	89.7	4.0
船木町	957	102	808	47	10.7	84.4	4.9
山口県	429,776	84,055	322,483	23,238	19.6	75.0	5.4
全 国	24,403,023	6,161,947	17,157,014	1,084,062	25.3	70.3	4.4

注：『1960年世界農林業センサス 林業調査報告書』および『1960年世界農林業センサス 市町村別統計書（林業地域調査）No.35 山口県』より作成。「全国」は沖縄県を含まない。

その他は竹林や人工林の伐採跡地など。森林面積は統計書のまま掲載。

しかし、地区を上げて林業に力を入れる方向には向かなかった。『1960年 世界農林業センサス』で、人工造林が全国的に盛んだった昭和30年代半ばの人工林比率をみてみると、調査地周辺は人工林比率が概して低い。特に旧万倉村の人工林比率の低さが際立つ（表2）。

このような状況を、NA は以下のように述べる。

万倉地区あたりでは、山林所有者の多くは農家で稲作があり、また町に勤めに出ることも可能であった。人工林を育て、何十年先にならないとわからないようなものよりは、勤めにも出て、米を作るという方向に向かっていった。この辺りは自然にまっすぐに伸びる松があり、遅くまで炭鉱に出すことができた。木が山にあればどうにかお金になっていたために積極的に植林しようという感じでもなかった、と。さらに、「田舎のほうの土木日当が300～350円の頃に米1俵の買入価格が4,000円くらいだったから、他の何よりも米を本気で作る動機づけになった。農家が兼業で林業する場合は、どうしても農業の日々の作業が優先される」と言う。

米60kg（1俵）当りの政府買入価格が約4,100円だった昭和35年、同年4月の国家公務員の初任給が上級（大卒程度）10,800円、中級（短大卒程度）8,400円、初級（高卒程度）7,400円であった。また、「広報くすのき」昭和34年8月1日の求人案内をみると、「坑内夫…男2名30才まで通勤日収400円以上外手当あり、サオドリ…男2名20才まで、通勤日収250円～280円、バス車掌…男女不問20才まで通勤月収6,000円外手当あり」とある<sup>12)</sup>。天然木と稲作が主収入で、農閑期には日雇いで勤めに出ることも可能であった。

しかし、天然木と稲作による安定した収入は長くは続かなかった。

他の仕事に比べ相対的に労働単価がよいという実感があった稲作は、やがてその実感が薄れていく。

昭和45年4月の国家公務員の初任給が上級（甲）31,500円、同（乙）29,980円、中級26,400円、初級23,140円で、国家公務員の初任給は10年間で約3倍になる一方で、同年の米の政府買入価格（60kg当り）は8,200円と約2倍にとどまった上に、減反が始まった。

一方の炭鉱は、すでに昭和24年に石炭の統制撤廃に伴い炭鉱企業整備に入っており、旧楠町内では昭和33年以降、順次整理対象となり、昭和39年には船木上沖炭坑が閉山し旧楠町内から石炭産業がなくなる。42年には宇部炭鉱が閉山、美祿市内でも主要な炭鉱は昭和45年に閉山した。

多くの研究が指摘するように、農家の林野所有は最初から育林経営を目的として所持されたものではなかった（山本美穂 2016:61）。万倉地区は統計でみると天然林から人工林への転換が進まなかったが、N家では昭和33年頃、39～41年頃、46年頃に植林している。上述したように、町の広報では31年から山の木の手入れについて啓発する記事を掲載していたが、NAは枝打ちなどをきちんとするようになったのは40年代半ば、楠町に林業研究会が出来た頃からはなかったかと記憶している。楠町林業研究会は、熱意のある人が集まって、みずから林業技術を習得、改善、向上して林家農家経営の合理化を進め、所得を増大し農家経済の安定を図ろうという目的のもと、昭和44年に発足している（「広報くすのき」第165号、1969年4月1日）。手入れをしなくても、山にあれば15年程度のサイクルで伐採し薪炭材として現金収入を得られた天然林から、手入れをして数十年後に伐採する人工林への転換は、農業が主な生業であった山林保有者には難しかっただろう。しかし、農業という毎年の収入源があることにより数十年後に伐採する木を育てることが可能だったという側面もあった

のである。

## 6. おわりに

行政村単位の統計から村により主要産品が異なることは別稿すでに述べたが、本稿では地形や水源などの自然条件や消費地までの距離などにより、村内部の生産物の地域差が生じ、人々の生業が多様である様子を述べてきた。農家における多様な副業については先行研究で明らかにされているが（宮崎 1985, 寺本 1998, 1999など）、その副業が必ずしも均質的に営まれているわけではない。山村の場合、平場農村とは異なる営みが加わり、生業が一層多様に現われる。さらに、集落内部においても各戸により生業が同一ではない。稲作があるため田植えと稲刈り時期はほぼその作業に集中するが、それ以外の時期は畑作や採取、薬工品製作など多様な営みがある。本稿では取り上げなかったが、これに地域の行事や親族との付き合いなどが加わり、生活構造は一層多層的になる。山村住民の生活を包括的に把握するならば、これらも視野に入れた分析が必要になる。

他にも本研究の課題として2点挙げておこう。

1つは、生業を通じた社会関係の分析が必要なことである。社会学固有の研究視点として、生業に左右されず人として取り結ばれる社会関係への関心が強い点があるが、山村の固有性を研究するのに生業の分析が不可欠であることは冒頭で述べた。しかし、本稿では生業の分析にとどまり、生業をめぐる社会関係まで分析を進めていない。別稿で述べているが、金品授受記録からは昭和20年代頃までは婚礼や葬儀時に集落内のほとんどの家から金品授受がおこなわれていた。このような関係のありようから村の閉鎖性を指摘することができるかもしれないが、生業の多様性は集落内における多層的な社会関係の構築を推測させる。

もう1つは、山村住民の営みをさらに追跡し分析する必要があることである。万倉地区は昭和25年の人口は3,513人であったが、45年には1,904人となっている<sup>13)</sup>。Q集落においても高度成長期に離農、離村が多く、昭和40年代半ばにはかつての3分の1にまで戸数が減少した。「山中では最初から自給中心の生活はたてられず、交易によらざるを得なかった」ため「どんな山中にあっても外部の影響をうける度合いはつよい。そして今日のように消費がぐんぐん山民の生活を追いだててくると、たちまちにして消費が生産をこえてしまう。消費に見合うだけの生産がなければその生活は安定しないばかりでなく、ふるさと以外の地に生産の場を見つけて働きに行かなければならなくなる」と宮本常一も述べている（宮本 2011:202）。宮本常一が想定した山民に比べると、Q集落の住民は水田耕作が中心の生活をしているため、平場農民との差は大きくないといえる。例えば薬工品生産は山村特有の営みではない。これを農民層分解という観点からのみ分析すれば既存の分析枠組での議論にとどまる。

本稿では平場農村とは異なる山村の特性を分析するという観点から、山林を所有する農家の生業の変化を見てきた。しかし、本稿で考察した時期は昭和20年代から40年代半ばまでである。山林を保有した多くの農家と同様、調査対象者のN家も農家と自認していた。ただ、多くの住民が離村・離農する中でN家は農業を継続し、天然林から人工林への転換があまり進まなかった地域の中で昭和30年代に植林し、「山林所有者としての林家」から「林業を営む家」となっていった。植林したN家のその後の営みについては改めて取り上げ、農家が営む林業の実態に迫っていきたい。

## 謝辞

本研究にあたっては、M家、N家の皆さんに聞き取り調査のご協力をいただき、N家からは資料を提供していただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

## 【注】

- 1) 万倉地区の概要については倉重 (2015) を参照のこと。
- 2) N家では化学肥料を使うようになってからも堆肥は継続的に作っていた。コンバインで稲刈りするようになり薬が裁断されて田んぼに撒かれるようになって堆肥を作らなくなった。
- 3) 谷あいとは谷間のこと。中国地方の西半分にエキという地名が多くあり、山口県ではふつう浴の字を当てている。エキとは谷あいの小平地で谷奥から流れ出る水を利用して生活を営む場所のこと。（谷川健一 1997: i - ii）。
- 4) ホノギについてはいくつか見解があるが、前田博司 (2003) が以下のように述べている。①ホノギは、藩制時代における土地制度上の公的な最小単位の区画を示す。各ホノギには、その場所を指定するための何らかの「小肩書き」が付され、或いは「穂ノ木付」の絵図などが添えられた。②ホノギ名は、それ自体は地名として独立しているとは言えないが、地名に準じた「小肩書き」として扱われる存在である。小字名（地名あり）—ホノギ（準地名）—「町」（地名なし）の段階が見られる。③土地の表示は、明治以後

は連続した数字を用いた「筆」記載へと移行した。そして、山口県域では、ホノギ＝一筆地説が有力な情勢のようである。Q 集落では本文中の意味合いで用いられていた。

- 5) 当時、山間部に位置する Q 集落では田植えは 6 月いっぱいかなかったが、万倉地区中心地域では田植えの開始時期が 6 月中旬頃だったという。中心地域は地形は平坦である上に、堤や川から一度に多くの水を田に張ることができ、田に水を張る時間がかからなかったためではないかと考えられる。さらに NI の印象では、Q 集落は平場の川の水に比べて山水が冷たいこと、山がちな地形のため日照時間が短いことなどからも、平場より早く田植えをする必要があったかもしれないという。N 家においても水の冷たい場所から田植えをしていた印象があるともいう。この点については検証をしていないが、同一地区内でも田植えの開始時期が異なることは、同一地区に居住する人々の生活リズムの違いを生み出す一つの要素となり得る。また、NA らが子どもの頃は、農繁期休みがあり、麦刈り、田植え、稲刈り時期に 2～3 日、学校が一斉に休校になっていたが、各家での作業時期に差があるため、必ずしも一斉休校日に田植えなどができたわけではない。
- 6) 木材を扱う仲買業者を当時は山師とよんだ。
- 7) ふごとは藁を筵状に編み輪にして片側を底として留め、片側に 4 箇所ひもをつけた物を運ぶ入れ物。棒（六尺と呼んでいた）の両端に下げ、棒を肩に掛けて運ぶことも多かった。
- 8) NA によると、牛舎という何頭も牛を買っているイメージで、農家が 1～2 頭買っている場合は納屋と呼んでいた。また、万倉地区の記録でも、牛舎で牛が餌を食べる姿を見ながら人も食事をするという農家の造りで、我が子同様に世話をしていた。旧万倉村は畜産が盛んで、山間部は黒毛和種生産牛、平坦部では肥牛（＝肥後牛？）が生産されていたとある（宇部農業改良普及所編集部 1984:19-22）。
- 9) 宮本常一によると、豊北町（現下関市豊北町）滝部に奉公市があり、角島の娘たちが春になると滝部に来て、そこへやってきて来た農家の人たちと話し合いをして奉公の取り決めをした。たいてい半年、長くて 1 年契約する者もあったという（宮本 1976=2012:150）。ここには娘と記述があるが、Q 集落某家に仕事に来ていたのは男性だったと M 家関係者は述べている。
- 10) 倉重（2015）参照。
- 11) 代金を払っていたか物々交換だったかなどはわからない。また、万倉地区の畜産の状況については宇部農業改良普及所編集部（1984）に詳しい。
- 12) サオドリとは、炭坑内の炭車の配送作業員のこと。
- 13) 昭和 33 年 11 月に万倉地区の一部が美祿市に編入した。編入した地区の人口は当時 325 人であった（「広報くすのき」第 39 号、1958 年 11 月 1 日）。
- 14) 高齢の方々への聞き取り調査の困難さについて述べたい。①高度成長前のことを伺ってきたが、昔の記憶の曖昧さもさることながら、子どもの頃の記憶の中には大人の行動まで把握されていないことである。子どもの頃からおこなっていた作業を通して理解ができていた大人の仕事の記憶はあるが、大人のみがおこなっていた作業については情報収集が困難であった。②話を伺うことができたのがほとんど女性で、男性と女性で異なる役割の作業のうち、男性の役割だった作業の掘り起こしが弱くなってしまふ。③終活として日記を処分しようと思っていると話されている方もおられた。記憶の曖昧なところを埋めるのに日記の記録は重要であるが、ご本人の心情を察するとやむを得ない。高度成長前の生活を掘り起こすのが年々困難になることを再認識した。

## 【引用文献】

- 藤川辰雄編 1951『山口県厚狭郡史』山口県厚狭郡町村会・山口県厚狭地方事務所。
- 蓮見音彦 2007『総論 村落・地域社会の変動と社会学』福武直監修・蓮見音彦編『講座社会学 3 村落と地域』東京大学出版会:1-27。
- 林信彰 1974「農業政策の破綻と出稼ぎ」『調査季報』（横浜市）43:12-19。
- 倉重加代 2012「山村の社会的分析に関する試論——林業と山村研究のはざままで」『地域政策科学研究』9:69-81。
- 倉重加代 2014「わが国山村の社会的研究の特色と課題」『西日本社会学年報』12:65-77。
- 倉重加代 2015「山村住民の生活構造——農林業に関する統計資料をもとに」『鹿児島女子短期大学紀要』50:39-52。
- 倉重加代 2017「山村住民の生活構造（2）——婚礼祝儀を事例として」『鹿児島女子短期大学紀要』53:25-32。
- 倉重加代 2018「山村住民の社会関係の変遷——金品授受控の分析から」『鹿児島女子短期大学紀要』55:5-12。
- くすのき広報委員会 1956「くすのき広報」第 8 号 楠町役場。
- くすのき広報委員会 1958「広報くすのき」第 39 号 楠町役場。
- くすのき広報委員会 1969「広報くすのき」第 165 号 楠町役場。
- 宮本常一 2011『山に生きる人びと』河出書房新社。
- 宮本常一 2012『生きていく民俗——生業の推移』河出書房新社。
- 宮崎清 1985『ものと人間の文化史 55-Ⅱ・藁（わら）Ⅱ』法政大学出版局。
- 農林省統計調査部編 1955『1950 年世界農業センサス 市町村別統計表 No.35 山口県』農林統計協会。
- 農林省統計調査部編 1962『1960 年世界農林業センサス 林業調査報告書』農林統計協会。
- 農林省統計調査部編 1962『1960 年世界農林業センサス 市町村別統計書（林業地域調査）No.35 山口県』農林統計協会。
- 谷川健一 1997『日本の地名』岩波書店。

- 寺本益英 1998 「大正～昭和初期における農家副業政策の展開」『経済学論究』52(2):103-130.
- 寺本益英 1999 「大正末期における全国の副業概況——『副業生産品ニ関スル調査』(1925)による分析」『経済学論究』52(特別号):149-207.
- 宇部農業改良普及所編集部 1984 『ふるさと万倉——農山漁村高齢者促進特別事業』山口県宇部農業改良普及所編集部.
- 山本美穂 2016 「農山村に刻まれた森林の歴史——人工林と農家のコーホート」藤村美穂編, 日本村落研究学会編『年報 村落社会研究第52集 現代社会は「山」との関係を取り戻せるか』農山漁村文化協会:59-93.
- 林野庁 2014 「平成25年度 森林・林業白書」(平成26年5月30日公表)  
<http://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/25hakusyo/pdf/6hon1-2.pdf> 2019/09/17アクセス
- 前田博司 2003 「ホノギ再考」山口県土地家屋調査士会『会報やまぐち』85:18-21.  
<http://www.chousashi.net/p/img/kaiho/kai85-0309.pdf> 2019/11/09アクセス

#### 【参考文献】

- 楠町議会30年誌編集委員会編 1985 『楠町議会30年誌』山口県楠町議会.
- 楠町文化協会郷土史研究部編 1973 『明治百年楠町文化史年表』楠町教育委員会.
- くすのき広報委員会 「くすのき広報」楠町役場.
- くすのき広報委員会 「広報くすのき」楠町役場.
- 炭鉱写真集編集委員会 1995 『炭鉱——戦後50年のあゆみ——』宇部市.

(2019年11月26日 受理)